

# 日仏文化学院フランス パリ日本人学校における現地理理解教育

前日仏文化学院フランス パリ日本人学校 教諭  
京都府京都市立岩倉北小学校 教諭 前田 幸

**キーワード：在外教育施設、フランス、国際理解教育、現地理理解教育**

## 1. はじめに

在外教育施設で働く機会を頂き、現地の教育施設を時折訪問し、教育関係者や保護者に話を聞くことで、フランスの現状を調査することができた。また、長期休暇が充実しているフランスだからこその学習内容、および環境や現状を正しく知り、日本と比較検討するという新たな視点で考える機会を得た。今回は、その概要を紹介したい。

## 2. フランスの学校教育について

### (1) 教育制度について

#### ①就学前教育 Ecole maternelle

義務教育が開始する前に、3年間もしくは4年間の就学前教育がある。日本の幼稚園に相当する。就学前教育の目的は、義務教育の開始前に言葉に慣れ、文字の世界に触れ、座ってきちんと先生の話に耳を傾けるなど「生徒」になるための準備をすること。時間配分は週4日、もしくは半日×9回のパターンである。またフランスにおける公立幼稚園の数は私立に比べて圧倒的に多い。

#### ②義務教育

フランスの義務教育は、原則として6歳から16歳までの10年間。普通に進級した場合、リセの1年目が16歳に当たるが、小学校から生徒の成績により、落第や留年・飛び級の制度があるため、義務教育期間に必ずしも皆が同じ課程を修了しているとは限らない。

年間の休暇にも特徴があるのがフランスである。休みは夏休みが約2カ月、そして冬、春、秋にそれぞれ約2週間ずつ休みがあるので、合計で年間約3カ月半になる。日本の夏休みが約1カ月、冬と春にそれぞれ約2週間ずつと計算し比べると、日本の長期休みが年間で約1カ月半少ないことが分かる。

#### ③初等教育 Ecole élémentaire

初等教育は、5・6歳から10・11歳までの5年間。日本の小学校1年生に相当するのが準備コース(cours préparatoire: CP)、2・3年生が初級コース1・2(cours élémentaire1: CE1, 2)、4、5年生が中級コース1・2(cours moyen: CM1, 2)となる。日本の小学校低学年に当たるCPやCE1の時期には、国語(フランス語)と社会に重点を置き、その他には算数、音楽や美術、体育と、日本とほぼ同様の科目を学ぶ(日本の場合は社会の代わりに生活科)。しかし、フランスではこの時期から既に外国語(英語、ドイツ語、地域言語などから1つ)の授業が始まり、日本の小学校と最も異なる点である。CE2以上の高学年になると、上記の科目に加え、文学や地理、歴史、理科、工芸などの授業が加わる。授業時間は、就学前教育と同様で1週間24時間。そのため低学年の間は日本よりも授業数が多いが、高学年になると、日本のカリキュラムの方が授業時間は多くなる。

#### ④中等教育前期 Collège

日本の小学校6年生～中学3年生までの4年間が、中等教育前期のコレージュに当たる。

#### ⑤中等教育後期 Lycée

日本の高校3年間は、フランスの中等教育後期であるリセに相当する。中等教育前期修了時に選択したりセで、それぞれ将来への道を歩み出す。

#### ⑥普通教育課程・工業高校・職業高校・大学 Université・グランゼコール Grande École と続く。

## (2) 現地校交流について

2年間、FRANCE・MONTIGNY 市にある小学校を訪問させて頂いた。この学校は幼稚園と小学校が併設され運営されている。初訪問時は、本来なら休日である土曜だが、学校でお祭りが行われていた。門や各ブースには数かずつ保護者がスタンバイしており、劇や歌、軽食や近くの公園までハイキング等の活動が用意されていた。いたるところに各ブースの担当者の表が掲示されており保護者が責任をもってそれぞれの担当となり活動が行われていた。子どもたちは学年ごとに分かれ、ブースをまわりながら、楽しんでいる様子だった。保護者の協力、そして関わりが大きいという特徴が見られた。今回はお祭りであったが、休日に行われる授業参観には保護者の人が子どもたちに社会科や理科、そしてコンピューター分野等、を教える授業スタイルが存在しているとのことだ。教員側からの要望をもとに得意分野での保護者が先生となった授業が行われているようだ。

また、毎回到り校舎を案内していただき、学習の成果物を参観することができた。中でも、いたるところに掲示されている図画工作の作品は驚くべきものばかりであった。本物の絵画に触れ、それを題材にした芸術作品ばかりだ。日本の児童作品と比べ、1つひとつはどれも小さい絵画や工作ばかりだった。しかし、自分の写真で有名絵画を作りあげていたり模写してたり幼稚園園児の作品からハイレベルなものが完成させられていた。



現地校での児童絵画作品

交流に際して、保護者に話を聞かせていただく機会も多くいただいた。中でも、授業時間や子どもたちが登下校する時間が正確であるという点に日本との違いが見られた。登下校は親の責任のもと朝は8時15分に入り口前に整列する。保護者の都合上、その時間より前に登校する園児・児童に関しては早朝料金が発生すること。授業時間と休み時間は時間通りで、午前中にはちょっとしたおやつのようなものが出されることも多い。休憩時間に担任が子どもと一緒にいることはあまりなく、子どもたちは外遊びをし、担任は休憩室に行くようだ。入り口にも鍵がかけられていた。現地校では盗難がよく行われるらしく、持ち物すべて自己管理という徹底した面が見られた。また、「やられたらやりかえす」という日本人の感覚にはあまりないものが根底にあり、弱さを見せられない状況にあると保護者の方は話していた。お昼になるとカンティーン（給食のようなもの）を学校で食べる子どもと、保護者が迎えに来て一度家庭に戻って食べる子どもと2パターンある。カンティーンの時間は1時間半と長くカンティーン担当の職員が子どもたちを手助けする。その後、午後の授業が再開されていた。下校は4時15分で、朝と同様、保護者の迎えのもと、学校の門を出ることになる。その後子ども預かりに関しても、追加料金が発生し、預かり担当の教員が指導にあたるようだ。教員は完全な教科担当ではないものの、曜日や時間で出勤が決まっていたり、担任をする専門学年があったりする。

日本人学校での交流では、文化的なもの「折り紙」を体験してもらった。低学年児童同士の交流ということで「鶴」と「エッフェル塔」を折った。和紙の素材や千代紙の柄に着目している子どもも多かった。折り紙がフランスでも定着しているように感じた。また「空手の型」の披露や「浴衣」の紹介にも興味をもっていた。またダンスと一緒に踊る際には、日本語でリズムをとるなど、相手の言語を上手に話せないけれど、聞こえてくる言葉を自然に口にしながら体で楽しむことが子どもたちはできていた。手遊び歌や遊びを通して、言語より先に雰囲気を感じとり、ボディランゲージで会話を進めていく子ども達の力に驚いた。昼食は「鶏の味噌漬け焼き」という日本風なメニューを食してもらった。児童は、アジア料理をお箸でいただくことに抵抗はなくどの児童もお箸を上手に使っていた。味噌漬けという味が初めての子も多く、口に合わない児童も中にはいたが、お米への抵抗も無いように感じた。フランスの食事の時間はとても長いということもあり、食事はゆったりとするものという

印象をうけた。何時間もかけて出てくるコース料理のように、前菜からデザートまでという流れが日本の昼食では存在しないため、一緒に来られた保護者は少し驚いていた。

### 3. おわりに

今回の派遣により、両校との交流学习に加え、フランスの学校に子どもを通わせている保護者の視点で物事を見たり、話を聞いたりする経験ができた。また、それを元に、教師の立場で日本教育とフランス教育の相違点を調査する機会を得た。フランスの学校やバカンス中の預かり保育、そして日本にルーツのある子どもたちが多く通っている補習授業校等の訪問が実現できたが、国独自のルールやマナー、制度に大きな違いがあることを正しく理解する重要性を再認識した。

フランス現地校に子ども達を通わせるご家庭の多くは、「知・徳・体」で分類すると、徳の部分を学校教育に求めている。調査に協力いただいた母親自身が日本教育を受けて育ち、普段日本人とあまり接点がないという生き方をしていることも大きいと考えられるが、極端な表現にはなるが、「和を以て貴しとなす」このようなことを教えたいと願う母親が大変多いという印象を受けている。日本人とフランス人の違いはもちろんあるが、心の部分でも日本人としての感覚を大切にさせたいと願っているように思う。また、母親自身も日本人としての感覚を日本に住む日本人以上に大切にしている点についても、自身が考えさせられるものがあった。日本に帰国した今、このような環境で生活する子ども達、そしてこれから世界に羽ばたく子ども達のため何ができるかについてさらに考えていきたいと思う。